

「当事者から見える支援」

～生活保護利用体験から生活困窮者支援について考える～

生活保護問題対策全国会議 幹事 和久井 みちる 氏

座長 座長を務めさせていただきます済生会金沢病院診療部長の岸谷でございます。よろしく願いいたします。それでは、本日の基調講演の方のご紹介をさせていただきます。演者の方は和久井みちるさんです。和久井さんのご紹介は、後ほど講演の中で自己紹介されると思いますが、私から少し簡単にお話しさせていただきます。

和久井さんは、大学ご卒業後、障がい者・高齢者の介護・支援にかかわるお仕事をされましたが、その後、自治体の福祉事務所にお勤めになり、まさに生活困窮者の方々を支援するお仕事をされておりました。ところが、いろいろなご事情から、今度はお仕事を退職され、ご自身が生活保護受給者にお立場を変えられました。その後、体のほうも回復され、現在はまた生活困窮者の方々の支援、そして支援者の人たちのご相談に乗ったりということを行なっております。

和久井さんはこういう経歴からして、生活困窮者の生活保護受給者というお立場と、支援者というお立場と、両方経験なさいました。そして、今回われわれのシンポジウムを企画するにあたって、人が人を支援するということが、当事者主体の支援ということで企画したときに、そういうふうに関わりを経験された和久井さんの話をぜひ聞きたいということで申し出をいたしましたところ、快く金沢まで来ていただきました。

本日この会場に250人以上の方がお集まりだと思っておりますが、皆さん、いろいろなお立場、福祉や医療、行政、教育、さまざまな人と接する、人を支援するようなお仕事をなさっている方々が集まっています。この会場でいろいろな立場の方がいらっしゃいますが、ぜひ和久井さんの話を聞いて、一緒に今後のいろいろな課題を考える機会になればと思っております。それでは和久井さん、よろしく願いいたします。

和久井 皆さん、こんにちは。和久井みちると申します。私、実は金沢は人生2回目です。初めてのときは、高校の修学旅行です。輪島塗の見学、総持寺や兼六園に行ったり、すごくいい思い出です。そのときに北陸金沢がすごく気に入って、生きている間に絶対にもう一度金沢に行くぞと、友だちと誓っていました。今日、その生きているうちの2回目

の金沢がここで実現いたしまして、大変うれしく思っています。

いまご紹介にあずかりましたように、私の紆余曲折あったこれまでの生活の中から、「当事者から見える支援」ということで、特に私が人の助けを必要とした当事者としての自分に見えてきたものを少しお話ししたいと思います。筋書きどおりの人生を歩むのが苦手なので、レジュメがあってもあちこち話が飛ぶかもしれませんが、どうぞお付き合いください。

まず、改めまして自己紹介をさせていただきます。私は、母が言うには大変難産で生まれました。当時はまだエコーがなかったので、予定日を過ぎてもなかなか産まれてこないで、すごく重い障がいがあったり、中で死んでしまっているのではないかという話がある中を、鉗子という道具で引っ張り出されたのだと聞いています。胎児のころから世の中に不信感があって、そうおいそれと社会になんか出るもんかと思っていたんだと、あとから思いました。父は公務員、母は専業主婦という、私たちの年代ではそんなに珍しくない、いまでもそんなに珍しくないかもしれませんが、そういう家庭で育ちました。

本が好きでしたが漫画も大好きで、少女漫画を読みあさっていました。でも、家で漫画を読んでいると、父が「漫画ばかり読んで」と怒るので、見つからない場所ということで木の上で読んでいました。人間は下を向いたり、前を向いては歩きますが、上を向いて歩いている人はあまりいないので、木の上にいると父に見つからないということで、漫画とか、自分の時間を木の上で過ごすという子ども時代でした。

大学入学時に上京して都会に出てきます。まだバブルの時代でした。

そのあとは、先ほどご紹介いただきましたように、障がい者施設、福祉事務所など、自分の中では同じベースの仕事を選択して過ごしてきました。

自分ではごく普通に過ごしていたつもりです。そこそこ人並みの年齢のときに結婚し過ごしていたら、そこでDV被害に遭ってしまう。DVのことを話すとそれだけで3時間ぐらいかかるので割愛しますが、いわゆる身体暴力のないDVです。一発殴られてあざでもできたら、こんな人とはすぐ別れようと思えたと思うのですが、そうではなくて、この苦しきはなんだろうということに気がつくことが難しい。毎日の生活の中でじわじわと管理される、支配される、コントロールされるというタイプのDVだったために、かれこれ10年近くそういう暮らしをしているの中でうつ病を発症しました。発症して初めて、自分はいまとても苦しい中にあるのだということに気がつく。自分はいま苦しんでいて、苦しいからうつになっているということが、病気になって初めてわかるということでしょうか。

そのうつ病の治療をしている最中、離婚とか大きいことを決めるなどいいますが、うつの原因そのものがDVなので、それはもう決別しなければ治らないという思いがあって、自分一人で離婚という決断をしました。そのときにうつの状態もひどくて、すぐに一人で働いて生活することができなかつたので、生活保護を利用して生きるという選択をしました。それから3年半弱、生活保護を使いました。

レジュメの下のところに書いてありますが、決して「そんなつもり」で生きていたわけではありません。DV被害の女性の多くが、「何でそんな人と結婚したの?」とか「付き合っているときわからなかつたの?」と言われて傷つきます。相談に行った先々でそんな事を言われて傷つく人がすごく多い。「あなたの見る目がないからだ」と言われたりしますが、そんな人だとわかっていたら結婚しないです、誰も。わからないから結婚するし、わからないところにDVの複雑さがあるわけですが、そこは世の中になかなかわかってもらにくい。誰も「そんなつもり」で生きているわけではないのです。パートナーに出会って結婚しようと思ったときには、誰だってハッピーな気持ちで「このまま私はこの人と幸せになるんだわ」と思っています。高望みはしないけれど、普通に楽しい生活をしようと思いきその選択をします。だけど、結果はそうはならなかつた。

誰が苦しいって、そうはならなかつたことを受け入れなければいけない自分が一番苦しなかつた。だけど、そこはなかなかわかってもらえない。DVの相談をするときには、相談先で傷つくということが本当にたくさんありました。いま言ったように、「あなたの人としての見る目がないからだ」という言葉はとてもたくさん言われましたね。

私には、いま話した経過の中にも非常にいろいろな側面の「当事者」がいます。例えば「女だから〇〇しろ」「女のくせに」「見る目がない」「あなたが夫をちゃんとコントロールできないからだ」といろいろなことを言われ、女性であるということで傷つくこともたくさんありました。また、私は女ばかりの姉妹で、実家が結構古いタイプです。金沢の方はわかると思いますが、「だれがお墓を守っていくんだ」みたいな文化があるところで、そういう意味では自由のない苦しい思いをしました。また、現在はひとり親ですが、シングルマザーということでのしんどさだったり、いろいろなことがあります。

それから、レジュメの右側に「患者であること」と書いてありますが、私、実は中学生の時に盲腸で入院して以来、15回ぐらい入院したことがあります。患者歴といいますか、患者力、患者慣れといいますか、患者として病院の何を見るかというところには、お姑さんではないですが、病院のこういうところを見て「ここの病院はこうだ」と判断するよう

な、みなさんに嫌われそうな患者の側面も多分に持っています。

また、すごく助けられて、こういう医療関係者に会ったことは幸せだったなと思うこともたくさんあります。例えば、足の関節が悪く、長くリハビリをしていたのですが、リハビリの先生には本当に助けられました。そのように、自分の当事者性の側面ごとに自分を支えてくれた人に出会ってきました。

うつがひどくて家事などができなかった時、福祉サービスを受けるためのパスポートだと思い精神保健福祉手帳を申請して手帳を持っていた時期もありました。そのときの私は、社会的に「精神障害者」でした。そして、生活保護を利用しているときには生活保護利用者。私は「受給者」とはあまり言いません。制度は能動的に活用するものだと思っているので、「利用者」という言葉を使いますが、生活保護の利用者だったということや、その他にもたぶん自分でも気がついていないような、いろいろな当事者性を自分の中に持っていると思っています。

そこで、これまでどのようなところに助けてもらったかについてお話します。レジュメのタイトルを書くときに「関わってきた支援（先）」と書きましたが、支援者なのか、支援団体なのか、個人なのか、区別の仕方がわからなくて、こんな書き方にしました。例えばDV のことであると女性相談、子どももいましたから児童相談所、相手が執着心が強くストーカー気質のタイプだったので警察にも相談しました。うつもあるから医師、離婚するために裁判をしたので法律家、手帳を持っていたときには障害福祉課、生活保護課、母子福祉課を一人で回り同じ事情を全部に話していた。ここに挙がっているだけでも七つ、八つあります。年度が変わって次の手続きに行くと、担当者が人事異動でいなくなっていて、また一から話すということも何度もありました。「また今年も話さなければだめなのか…何故、引き継いでくれないのか」とずっと思いながら、いろいろな窓口を行ったり来たりしました。

支援を受けた人の中には、例えばその時点で仕事をしていた職場の、一部理解のある人もいます。他に、私の所属として書いてありますが、生活保護問題対策全国会議といって生活保護の問題に関わり、困った人たちをサポートしてくれるような団体の方とか、貧困・困窮の問題にかかわっている方たちに出会う中で助けられてきました。支援者という呼び方はしないけれども、友だちも、困ったときの私を支えてくれる支援者としての存在でありました。

ただ、人に助けってもらうには、ものすごくいろいろな事務手続きが必要だったり、言い

たくないのに自分をいっぱい開示しなくてはいけなかったり、開示したのに傷つけられたり、そんなことがたくさんあって、自分が安心して安全に暮らしていく基盤は、ここまでやらないと達成できないのかと。一人の人が一緒に付いてくれたり、私の代理でこの支援先の段取りを全部やってくれるような人がいればいいですけど、いま日本の支援はそういうことはなかなかできていないので、何でも一人で行かなくてはいけない。警察に行くのも自分、法律家のもとに行くのも一人、ものすごくエネルギーがいる。「それだけの活動量って、普通に働いている人より、もしかしたらよっぽどエネルギーが必要で大変なんじゃない？」と言われたこともあります。うつで仕事はできないけれども、違う意味で毎日役所に通っている、そういう生活をしていたことがありました。

ここにお医者さんが支援者と書いてあります。私はうつで 10 年弱ぐらいお薬を飲んでいました。その間、ずっと同じクリニックに通っていました。DV によって具合が悪くなったのだと自分ではわかっていましたが、主治医に「実は私の家庭には DV という事情があって、そのために具合が悪い」と打ち明けるのに 7 年かかったんです。7 年間、言えなかった。

何故かいうと、信用できないのではなく、お医者さんは、そういう仕事の人じゃないと思っていたから。「眠れない」と言ったら眠れるお薬は出してくれるし、「不安が強い」と言えば安定するお薬を出してくれる。だけど、家庭に DV があるということをお医者さんに打ち明けても困るだろうなと思ったり、打ち明けたことで何かが変わることってあるのかなとか、かえって傷つくことを言われたら嫌だなという気持ちがあった。7 年目に打ち明けたときには、「そんなことがあったなら大変だったね」と言ってくれましたけど、そう言ってくれるだろうと思えるまでに、7 年かかったということです。本当に長い時間たくさんのお金を回って、どうにか立ち上がる基盤をつくってきました。

レジュメにロボットの絵がありますが、なぜロボットかを説明します。

いま話したよう 1 個 1 個の問題について相談に行く先がバラバラ、相談する人がバラバラ、施策がバラバラなので、私は「和久井みちる」という人間ですが、行く先々で右手右足、両手両足バラバラにケアを受けるような感じです。母子のところは母子、警察は警察、お医者さんはお医者さん、障害福祉は障害福祉、トータルで「私」という人間が困っていることに向き合ってくれる支援先には全然たどり着けない。いつも部品ごとの修理で、その部署に自分の部品を差し出して見てもらうということをやっている。

しんどい時期、何が一番大変だったかといったら、部品ごと対応されることだったと思

います。私という人間を理解してくれる人に全然出会えない。顔を見てくれる人がいないんです、事柄は見てくれているけれど。私がどういう人間なのかということを知っていた人は、どんな人がいたかなと思えば、長くかかわってくれていた弁護士さん、友だちはわかってくれていただろうけれど。いわゆる相談窓口の人が、私という人間を見てくれていたかどうかと考えると、なかなかそこにたどり着けない。「ああ、あその人はわかってくれた」と思える窓口が残念ながらないのです。

窓口はいまもバラバラになっています。何か困っている時に、ひとつしか困っていない人って本当はあまりいないですよね。最初のご挨拶の中にもありましたが、人はいろいろな側面で困りごとがあります。健康を害するとなったら、働けないからお金に困るとか、気持ちも不安定になる。家賃を払えなくなったら住まいも失うとか、一つのことに困るとドミノ倒しのようにいろいろなことが起こってくる。しかし、一人の人、「この人」の悩みというふうに窓口はまったくなくなっていない。

こちらの窓口は親切だけど、あっちで嫌な思いをすともうあっちには行かない。すると、嫌な人に会った窓口の困った部分はちっとも解決しない、だから全体のバランスがいつまでもよくなる、みたいなことがずっと繰り返される。私の周りにもたくさんそういう人がいます。だから、「私はロボットじゃないんだけどな…」と、いろいろな窓口に行くたびに思っていました。

ここで話をさせていただくことになったときに、資料をつくりながら、嫌な思いをした経験を少し紹介しようと思いましたが、それだけではよくないと思い、よかったことも紹介しようと思ったんですね。レジュメの「傷ついた支援」の次のページには、「よかった支援」がありますが、よかったことを思い出そうと思ったら、傷ついたことの半分も思い出さなかったのです。私、すごくたくさん傷ついて生きていたんだなと。これは「支援の窓口に行って傷ついたこと」ですが、残念ながら嫌なことのほうがいっぱい浮かんできちゃう日々だったんだなと思えます。

どんなふうに傷ついてきたかを少し紐解くと、女性の支援窓口もそうですが、生活保護の窓口でも同じように「あなたの努力が足りない」と言う方はいます。さっき言ったように、私は毎日あちこち役所の窓口で事情を説明し、「そうじゃなくて、ああじゃなくて…」と話し、自分で横のつながりの役もしないと助けてもらえなかった状況の中で、「本当に大変なんです。私、これ以上頑張れないというほど、お百度参りのように役所に相談に行って、何とかしようと頑張っているんです」と訴えているのに、「いやいや、あなたの努力が足り

ないんです」と言われて、家に帰って玄関にへたり込んで泣いたことがあります。いま思い出しても悔しかったですね。

あとつらいのは、「頑張っていない私（頑張れない私）」を、頑張っている人と比べる。医療機関でも、「あなたと同じ病気でも、リハビリを頑張って歩けるようになった人がいるのよ」と言われて、ショボンとしている人を見かけたことはありますが、人と比べられるということ。いまの「私がどうか」ということじゃなくて、事柄とか状態で、同じ状態の人で「できている人がいる」という比較をされる。いまそれが「できない私」なんだということは、どこかに忘れられちゃうということですね。

あと、病名で呼ぶというのがあります。これは残念ながら、福祉現場で支援をしている人の中でも私はしょっちゅう耳にするんですけど、「あの精神の人がね」という台詞ですね。本当に暗澹たる気持ちになる。「精神の人」って何ですか。体の具合が悪い人のことを「身体の人がね」とは言わないですよ。 「あの糖尿病の人がね」と、人格を交えて病名で指したりはしないのに、どういうわけかメンタルに病気を持っている人のことはまったく個別人格を無視して、「あの精神の人はさあ」というのをあちこちで聞くんですね。すごく嫌な気持ちになります。その「くくり」やめませんか。

精神的な側面で疾患を持っていても、それぞれ病名も違うし、人が違えばどういう状態像なのかも違う。うつだって、寝たきりになっちゃうようなうつの人もいれば、そろそろ仕事を始めようかというくらいの人もある。その人その人の背景や人柄、ステップがあって、その「ある状態」なのに、病名で人を呼ぶ。私が精神障害の手帳を持っていると知っているはずの窓口の人が、向こう側で「あの〇〇の人が…」と話していたり。そこに私という、和久井みちるという存在はまったくない。それが傷ついたことトップ3に入る記憶ですね。

あと、いまアセスメントというのが支援現場ではすごく流行っていますが、あれも「設問項目が書いてあるから順番に聞いています」みたいな、相手の顔も見ないでシートを見て聞きます。聞かれているほうは、ものすごく自分の気持ちの奥の言いたくないこと、家族とうまくいっていないとか、そういうことも含めて話をしなければいけないのに、粛々と顔も見ないで聞かれる。私も相談の現場では気をつけようといつも思っています。

あとは、知っているのに「知らない」、わかっているけど「わからない」と言ったりする。例えばDVってどういうことか知らないのに、「わかっているから」と言ってアドバイスをしようとするなど、そういうことにすごく振り回されます。わかると言ってくれたから、

やってくれると思ったのにできていないじゃん…。これは相談してくる人がうまくいかなかったというのではなくて、支援しようとしている人が、そう振る舞うことで相談者が傷ついたという事例です。

あと、自分がうつだったときに嫌だなと思ったのは、もう頑張れると思っているときに、「まだ無理、まだ無理」と言われることです。せめて「やってみれば」と言ってほしい。「だめだったらまた休もう」と言ってくれば、自分も納得できますが、週3回の仕事ぐらいは頑張れそうだと思うのに、「まだ無理、まだ無理」と言われて半年が過ぎるみたいなことです。じゃあ、どこで立ち上がればいいのか自分ではわからなくなる。やれると自分が思ったときにできない歯がゆさ。もちろんドクターやケースワーカーが見ている視点というのはきっとあるのですが、「私が見てここがこうでこうだから、こうなるとマイナスになっちゃうから少し様子を見ようね」という話にはならなくて「まだ無理」とか、逆に無理だと思っているのに「行け行け」と言われたりというのが、自分のうつの経験のときにはものすごくありました。波長が合わないという感じです。

私がそういう経験があるということを知っている人たちの中では、同じような話をよく聞きますが、みんななかなかそこが言い出せない。今日は医療関係の方がいるのであまりあざといことは言いにくいですが、お医者さんとか看護師さんに、患者のほうから「それは違う」とか「それはおかしい」というのはすごく言いにくいですね。「この薬合わないんですけど替えてください」「この薬を飲むと3日ぐらい寝ちゃう。強すぎてだめ」と思っている、合わないとか、やめたいと言うと、先生の判断にけちをつけると思われて、ご機嫌を損ねてしまうのではないかという患者なりの大人の判断があって、黙って薬をもらい飲まないとか、そういうことが周りにはたくさんあります。何とかそこで打ち明け合うことができたのもっといいのと思うことは実はよくあります。

それから、当事者には〇〇ができないという説。一番よく言われるのは、「当事者は支援者にはなれません。無理よ」というのがよくありますが、当事者である私という側面からいえば、別に当事者じゃない人たちだって「支援者は無理よ」というタイプの人はいくらもいる。だれがそのポジションに適任かとか、やる気持ちがあるかとか、成長していける人なのかというのは、当事者か、当事者じゃないかというところのくくりで決めるものではなくて、人としてどうという話だと思うんですが、なぜか「当事者には無理よ」という非常に大ざっぱな物言いで、さっきの「精神の人」と一緒ぐらいのくくりで言われることがあって、嫌だなと思うことがよくあります。人を「当事者か、支援者か」ではなくて、

どういふ人なのかというところで見ても向き合ってもらえたらいいのかなと思います。

憤った、傷ついた支援のことを振り返ったあとに、力をもらった支援について考えたのですが、一生懸命考えて4個しか出てきませんでした。実はもっとあるかもしれないけれど、いまの話と反転した感じでいうと、私という人のことをよく見てくれていた方ですね。例えば、問題は全然解決していない、病気自体もよくなっていない、傷もまだ治っていないけど、「今日はいい表情しているね」「前より少し声に張りが出てきたね」「この前は元気がなさそうだったからちょっと心配していたんだ」とか、見ていてくれたんだなと思うときの声かけは、何か解決できたとか、支援策をいただくという直接的なことよりも、むしろすごく元気をもらった場面だったなと思います。

あと、自分にストレスや負荷が非常に多いとき、相談員の前でもうまく伝えられなくて、言葉が雑になったりしたときに、少し距離を置いて「いましんどい時期なんだね」というぐらいの大きい気持ちで見えてくださって、こちらが「ちょっと失礼なことを言っちゃったかな」というときにも、次に会ったときには全然普通にまったく同じように接して下さったりする。そういうときはとてもうれしい。

すごくひどいことを言ってしまった記憶もあります。「何かあったらお話を聞きますよ」と声をかけてくれた人に、「何の解決もできないくせに、話を聞く、聞くって、聞くだけで解決にならないのに、気休めのように言うのはやめてよ！」と。その方は怒って立ち去るでもなく、悲しかったかもしれませんが特に何を言うでもなく、黙っていました。でも、次に会ったときにはまったく普通に接して下さった。悪かったなという思いとともに、うれしかったのはいまでもすごく記憶に残っています。

あと、一緒に憤り、一緒に喜ぶというのがあります。喜ぶというのは皆さんもわかりやすく、病気の回復とかいろいろなことを一緒に喜んでいらっしゃったと思いますが、一緒に憤るというところがすごいミソで、一緒に怒るとか、一緒に泣くとかではなく、「憤って」もらいたいんですね。理不尽なことを言われたり、起こったり、やり場のない気持ちを一緒に憤ってくれるというんですかね。ある意味、お金をもらってきましたというより、さっきの私の表情を見るというのと一緒に、「そんなことが起こったら、それはそういう気持ちになるよね」と、ピッと横に近づいてきてくれるような場面が私の記憶の中にとっても印象に残っています。

それと、対価や評価、代償を求めないというのがあります。代償とは、わりと頑張っている支援者の方に多いのですが、「私がこんなに頑張っただけなのに、相談者がそれに応え

ない」みたいなときですね。お膳立てはいろいろ試みて、いろいろな準備をして待っていたのにいきなり来なくなっちゃうとか、全部パーにするような出来事。当事者からすると、その日、そのときに恐くなってできなくなるとか、動けなくなるというのは実によくあることなんですけど、それを前提にしていなくて支援者側が怒る、いらだつ。「ありがとう」と言わないとか。

そういう台詞を私も言いたくならないわけではないです、支援の現場にいる側面の自分としては。だけど、結局支援している自分の側がたぶん認めてほしいという気持ちがあるから、それに応えてもらえなかったときに怒るという気持ちなのだと思います。でも、当事者としてはそれをぶつけられると、非常にとまどいがあります。「できない自分、できなくなっちゃう自分だから、今、困っているんだよ」という思いがある。そのしんどさみたいなものは、支援を提供する側の方々にどうしたら通じるのかなというのは、考えていた時期が長かったです。

もちろん、大人の対応というのもおかしいですけど、距離の取り方とか気持ちの寄せ方が本当にナチュラルな方もいるのですが、そうではなくて、感情的に怒られるということもなかったわけではない。当事者にとって、対価を求める支援は全然支援にならないので、本当は支援って何だろうねという、そこが本質のところにつながるのかもしれないし、支援者という立場でも苦しいところなのかもしれません。

レジュメの生活困窮者の支援を考えるというところなんです。私はいま生活保護ではないですが、別に生活が楽なわけでもなくて、どっちといわれれば、限りなく困窮に近いというか、困窮の中にいるといいますか、そういう生活をしています。つまり、いつでもだれでもそうなりうるということなんです。私は DV になってうつになりましたが、DV に遭遇しなくてもうつになっちゃう人はいるし、うつじゃなくても身体的な病気になっちゃう人もいます。「結婚してうつになりました」というパターンではなくて、「結婚していない人が一人で働いていて、病気になって働けなくなった」ら、それだっていきなり生活困窮になるわけです。生活困窮者自立支援制度というのが出来たことで、それがなかったときよりは少し困窮という言葉が広がっているのかなという気はします。まだ社会一般にポピュラーにはなっていないですけども。

生活保護はどこか特別と思っている人が何となく多いですが、私自身がその前に福祉事務所に勤めていたという経験があったがために、困ったときには生活保護を利用していいんだと、割と素直に思っていた。だから、自分が危機的な側面になったとき、「あっ、いま

自分は生活保護を頼ればやり直せる」と考え、生きていく手段の一つとして生活保護を使うことができたので、あまりマイナスなイメージはなかったんですね。

生活保護が嫌だと言う人にたまにお会いすると、よく話すのは、足を骨折した人がギブスをして歩いていることを笑う人はいないでしょう、ということです。ちゃんと足を治すためにギブスは必要だよねと思うし、松葉杖を使う、車いすに乗る、それはそのために必要なことだとみんな普通に思う。生活保護は、経済的に困窮したときにそれを外から支えていく経済的側面のギブスだと私は思っています。ギブスだから、自分が経済的にもう一度やり直せる時期が来たら外せばいいんです。その制度は卒業すればいいのです。

卒業できなくて、その病気が治らない、足が治らないんですという人が車いすを使って生活するのと一緒に、ずっと生活保護が必要な人は必要だから使っていく。それが当たり前の社会になってくれればいいと思うのですが、どうもいまは生活保護バッシング、ヘイトの書き込みとか、いろいろある中で広がっていかない。ですから、もう一歩外側からそこに近づいていく一つのアピールの仕方として、生活困窮者支援ができたのかなと思います。

あと、生活困窮者の窓口は、例えば65歳以上が対象とか、ここは18歳未満とか、障害者手帳のある人ですとか、そういう仕切りがほとんどない窓口です。だから、いままである制度の中では一番縦割り率が少なく、いろいろな事情のある人が窓口に行ける。最初に私がお話ししたように、いろいろな窓口に一人で行かなければいけないときに、もしかしたらその窓口でワンストップになる可能性はあるし、全部をコーディネートしてもらえる可能性もあるかもしれません。

厚生労働省は「断らない支援、断らない窓口」と言っていますが、支援する側としては、断らないで全部やるのはすごく大変なことです。私はさっき自分が支援者の支援に携わっていると言いましたが、パンドラの箱が開いたような状態で、押し寄せてくる人たちに向き合うのがどんなに大変かも、一方ではよく見えています。それでも市民が、困ったらとりあえずここに行ってみればいいらしいよ、と思える窓口が一つあることは、暮らしにとってはプラスなのかなと思っているし、そうあってほしいと思っています。

一つ、生活困窮者の自立支援の法律的な理念でいうと、いままでの制度施策の中にはまったく書かれていなかったですが、相談者の尊厳の確保、公平性が理念としてうたわれている制度です。これが支援に向き合う人の中に第一義に掲げられたという意味では、そこはすごく大きい。

生活保護制度には、それが無いからすごく惨めな思いをさせられる。ケースワーカーには、もちろんいい方もいますが、管理的・主導的だったり、あるいはもっと高圧的だったり、そういう対応になりがちです。しかし、理念が第一義に来るということになると、そんな高圧的な態度で尊厳の確保なんかできるわけがない。なので、生活困窮の制度の理念が先行し、そしてもっと大きく広がっていくことがもし実現できれば、困っている人に対して高圧的に指導をするという社会から、本当に「支援」をするんだよねという質的な変化が期待できるのではないかと考えています。

支援のつもりで指導をする、もっと言うとコントロールする。「私の言ったとおりにやっていたらあなたは間違いがないのよ」とか、だれが主体なのかわからなくなるようなカッコ付き「支援」というのが、実はいままでここに見え隠れして存在していた。相手を大切にすることとは、そのことに気がついているごく一部の人たちの中では、頭の中、あるいは胸の中がありました。ただ、全体としてその人を支えていこうとしたときに、10人の支援者の中で9人が指導的・高圧的だったら、その人はちっとも楽になっていかない。そういう局面がいままでたくさんあったと思います。だけど、これからはそうではなくて、その人を大事にしなければいけない、指導するのではなくて支援するんだよね、支えるんだよね、応援するんだよという考え方が「面」として広がっていったならば、部品のような扱いの支援というのが、もう少し質的に厚みのある、優しいものになるのではないかと、いま思っています。

その制度をどのようにしていくのか、どう育てていくのかは、市民である私たちの側にかかっている、「それ、おかしいよね。それじゃあ元気になれませんよ」と、支援現場にいる人と、できれば当事者も一緒に声を出して、「それだと元気にならないんです」と、もっとシンプルに、素直に、お互い言い合えるようになったらいいと思っています。

これからの支援に私が何を期待したいかですが、ずっと繰り返しお話ししてきました、例えば性別、年齢、職業、肩書き、病名、いわゆる事柄とか属性、何に悩んでいる人なのかということではなくて、その人、その方と対等にこれからのことが考えられるというのが、私が期待したい支援かなと思っています。問題は多面的ではありますが、中心はその人なので、そこは絶対に外してほしくない、そこを見る目はきちんと持っていてほしいと、すごく強く思っています。

それから、何が満足か、どんなときがハッピーか、何が成功なのかは、人それぞれに違っていると思うんですね。1億円当たっても少ないと思う人もいるかもしれないし、どん

なに小さいことでも「今日はハッピー」と思う人はいる。治療する方法がなかなかないという病気の方は、その病気が判明した時点から命尽きる瞬間までずっと不幸なのかといったら、決してそうではないと思うし、その日、その1日、その瞬間の中で心地よさだったり、楽しさだったりというのもきっとあると思います。その人がその前の瞬間よりも、もうちょっとハッピーだったり、ハッピーな気持ちがもっと継続したり、そういうことが大事なんだよねと。何かの支援策にはまらないからだめとか、そういうことじゃないということも考えられたらと思っています。

今日、ここにお医者さんや看護師さんもいらっしゃると聞きましたが、お医者さんは病気にならないかといったら、きっとそんなことはないでしょうし、看護師さんは骨折しないかといったら、そういうことでもない。医療関係の方が患者になることだってもちろんあります。私は福祉事務所で働いていたけれど、自分が生活保護の利用者になったように、人は、いろいろな局面をいろいろな環境の中で生きている。自分だけは違うと思って差別やバッシングが広まるという風潮を、少しみんな考えていくことはできないだろうかと思っています

「オギャーと産まれたときに人を差別する人はいない」と、南アフリカの大統領だったネルソン・マンデラが言っていたそうです。オギャーと産まれたときに「あの人嫌い」とか、人を見下す態度で産まれてくる人はいないと思います。だから、差別や偏見は後天的に生じるものだということなんです。差別的な考え方や間違った知識による偏見に、生きている途中のどこかで遭遇している、それをそのまま信じてバッシングが生じる。じゃあ、何に触れ合えば、そうならないだろうかを、私たちは一緒に考えていかなければいけない。生活保護は恥ずかしくないよとか、バッシングする人って本当に困った人だよ、ということだけではなく、何でその人はバッシングするんだろう、どうしてその人は恥ずかしいかと思ってしまうのだろうかというところまで、できるだけ近づいて向き合わない限りなかなか解消されないと思います。

今日ここに参加された皆さんの中にも、「生活保護の人って本当にだらしのないよね。言ったことをやらないし」と思った方がもしかしたらいるかもしれない。「そうはいつでも、私たちは本当に振り回されて日々大変な思いをしている。こんなに頑張っているのに」と思っている方も、もしかしたらいらっしゃるかもしれない。そう思ってしまう自分はどこから生じているのかということと一緒に見つめ直すところに立ち返って、自分自身を見つめる。私の中にだって知らないことや差別や偏見はもちろんあるかもしれません。でも、

できるならそうじゃない自分のほうがいいなと思います。知らなくて「怖い」と思ってしまふものに出会ってしまったときに、どうして私はそれが怖いんだろうと。自分の偏見、弱さ、醜い部分を受け止めていくのはすごくしんどい作業ですが、今日出会った皆さんとは、ぜひこれからも一緒に考えあっていけたらいいなと思っています。

お伝えしたかったことがうまく伝わったかどうかわかりませんが、皆さんが普段とても努力なさって、ご苦労なさっているということはわかりつつも、今日は私が当事者として感じてきたことを少しお話しさせていただきました。これからも一緒に考えていけたらうれしく思います。貴重な時間をありがとうございました。

座長 和久井みちるさん、ありがとうございました。率直にご自身の経験を飾らない言葉で語っていただきまして、そこから見えてきた課題やこれからの支援者に期待すること、われわれにとって非常にたくさんのヒントをいただきました。本当にありがとうございました。まだまだお聞きしたいと思いますが、後ほど和久井さんはシンポジウムにも登壇していただきますし、さらにいろいろ知りたい方は、和久井さんが2012年に発行されました『生活保護とあたし』、「私」ではなく「あたし」という飾らない言葉で書かれている本がありますので、ぜひそちらをお読みになればと思います。それでは最後に和久井さんに盛大な拍手をお願いします。ありがとうございました。